
それは素敵な休暇の過ごし方 ~ 2日目：午後~

阿佐木 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それは素敵な休暇の過ごし方 2日目：午後

【Nコード】

N2644BA

【作者名】

阿佐木 零

【あらすじ】

pixivにて投稿していた東方project二次創作です。前回投稿した二日目の後半部分となります。お昼になったので自宅の修理をお願いしに行く回。

さて、お昼も半ば過ぎた頃、私と紫は昨日言っていた大工の元へと向かっていた。

本当は午前の中に片付けておきたかったのだけど、藍から八雲家の規則を教わっていたら遅くなってしまったのだ。

やっぱり居候になる以上、ちゃんと知っておかないとね。

「でも映姫、何で歩いてるの？ 怠いし面倒くさくない？」

「老化するのも大概にしなさい」

「何気に酷くない！？」

休日なんだし、たまには空を飛ばずに歩いて行こうと考えたら」
しだ。

紫はさつきから文句ばかり言ってくる。

その癖して、ちゃんと着いてきてくれるんだけど。

「人間の里にあるのよね？」

「そう、ねえ……少し外れてるかしら。微妙かも」

「ふうん」

あの辺りで大工の仕事をするのなら、必然と妖怪達も絡んでくるだろう。

里の中ではなく、外れに構えているのはそういう理由があるのかも知れない。

「ま、あれだけ綺麗に壊したら大丈夫よ」

「何が大丈夫なんだか……」

むしろ自分でもやりすぎたと思って反省しているんだから。

確かに紫の言う通り、綺麗さっぱりぶっ壊れてくれたのだから、諦めという点ではついている。

でも、お気に入りの下着とか服とかが全部丸ごとぶっ飛んだのは納得出来ない。

「ほら、隠してた下着とか。見栄張らなくていいのよ？ ほら、見栄はって買ってた大人なやつとか」

「なっ！？ ゆ〜か〜り〜！」

「おほほほほ」

「いつ見たのよ、貴方はー！」

扇子を広げ、わざとらしい笑い声で逃げるように先を急ぐ紫を追って走りだす。

まったく、油断も隙もない。

でも不思議と、私と紫も飛んだりはしなかった。

その方が楽しいってわかっていたから。

人間の里から少し外れた家は、実に簡素だった。正直な話、家と

いうよりも倉庫に見えるほど外見はしょぼくれている。

大工をしているのなら自分の家というか仕事場はそれなりに”魅せる”ために着飾ったりしているものだと思っていたが、どうやらここはそうでもないらしい。

「入るわよー」

「はい」

勝手知ったる他人の家。紫は中から返事がある前に既に玄関の扉を開いていた。

間違いなくあの魔法使いの影響を受けてるわね……。

「はいはい、いらっしやい」

中は仕事場らしく、材木や金属までところ狭しと転がっていた。何か作っていたのか、作業途中のものもある。

「仕事の依頼よ、いいかしら」

「もちろんですよ」

そう言って作業着を来た妖怪が歩いてくる。

「映姫、紹介するわ。河童の河城にとり。最近は人間の里付近まで降りてきて、大工の真似事してる」

真似事!?

「え、ええ。よろしく。四季映姫・ヤマザナドゥよ」

「河城にとりです。説教臭い人って良くみんなが言ってるの聞いてますよ〜」

へえ……。

「知らずの内に地雷踏んじやってるわね……まあいいわ。実は家が壊れちゃってね。直して欲しいのよ」

「ほう。どこのです?」

これ、と紫は私を指さした。

私は紫の指を叩いてから、咳払いの後に家の状態を話す事にした。

「家は全壊。原型を留めている部分はほとんど無し。元は天井だった部分には大穴が開いていて、家の壁は丸ごと吹き飛んで消滅しています」

自分で言ってるけど、壮絶な倒壊だと思う。

にとりもそう感じたのか、頬を引きつらせているのが良くわかる。

「ま、まるで鬼にでも暴れられたみたいですね。それで、期限とかはありますか?」

鬼ならここにいるけどね、と両手の人差し指を立てて頭から突き出している紫が横目に入ってくる。

「そうね……出来れば後5日以内にはお願いしたいんだけど」

「うーん、それだけ壊れていてだと厳しいですね……」

やっぱりあれだけ派手に壊してしまうと難しい、か。
うーん、どうしたものか。

「んーでも私ひとりじゃなかったら　よし、やってみましょう！」

「本当？」

「もちろん！　その代わりに、人手を借りるので少しだけ……ね？」

にとりが申し訳なさそうに人差し指と親指で輪っかを作ってみせてくれる。

背に腹は変えられないのだし、私は頷いた。

「ええ、お願い。場所はこれから案内しましょうか？」

「あ、お願いします。ちょっと待っててくださいね」

そう言って、にとりは奥へと引っ込んでいった。

「何とかかなりそうで良かったじゃない」

「まあ、ね」

でも逆に言ってしまうえば、その間は八雲家に居候する事になる。

少しだけ申し訳なく思ってしまうのは、八雲家（紫を除く）に迷惑がかかってしまうからだろう。

「だいじょーぶよ」

「？何が？」

「藍も橙も、そんな子達じゃないから」

「……そうね」

だからこそ、なんだけどね。

私は店の奥から戻ってくる足音を聞きながら、胸中で呟いたのだ。
った。

未だに瓦礫の山状態の我が家である程度説明をし、話し合っていたらもう日が傾き始めていた。

私たちは暗くなる前に人里まで戻ると、簡単に打ち合わせをしてからにとりの工房を後にした。

「適度に見に行くの？」

「そうするつもり。気になるしね」

「やあねえ、腕はばっちりよ？」

「どこかのスキマ妖怪が悪戯してないか確認しに行くのよ」

「いゃん」

夕暮れ刻の人里を歩いていると、店じまいをしているところもあれば、景気よく商売をしている店もある。

そつえば、今日の料理当番は私だったっけ。

「何か買って帰る？」

「ん〜？ 別にいいんじゃない？ 藍が準備してそうだし」

それもそうか。

あの式神はこの主人に勿体無いくらい優秀だし。

でも

「やっぱり少し覗いていく」

「そう？」

近くにあった店を覗きながら、いくつか買い求めていく。
おまけしてくれる店もあったりで、なかなかどうして楽しい。

「あ、ネギは無しにしてよね」

「大盛りにしてあげるわ。食べ無かったら地獄行きね」

「酷いっ！」

お仕置き用の食材も買った事だし、帰るとしよう。

食材の入った紙袋を抱えながら、やっぱり歩いて帰る。

「帰りも飛ばさないの？」

「歩く方がいいじゃない」

「そうかしら」

「そうよ」

それに

「歩く方が、飛ぶより長い間一緒にいられるでしょ？」

「そ、そうねえ」

慌ててそっぽを向いた紫はきつと真つ赤なんだからなって思う。
もちろん、私もだけど。
本当、夕暮れで良かった。

「あ、紫様ー！」

遠くから元気の良い声が迎えてくれる。
家の前で橙がピョンピョンと跳ねながら大きく手を振っている。
それは見ているだけでこっちまで嬉しくなるかのようにだった。

「おかえりなさい。紫様、四季様」

おかえり、か。

久しぶりに聞いたかもしれない。

私は一度だけ目を瞑り、それでもはつきりとその光景が思い浮かぶのがわかって。

「ただいま」

自然と浮かぶ笑みを隠す事なく、今の家へと向かったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2644ba/>

それは素敵な休暇の過ごし方 ~ 2日目：午後~

2012年1月6日19時45分発行